

空



2011・2

SORA 35号

繭玉

柴田 佐知子

輪飾の楫飛ばす灘の風

一族を見上げてばかり春著の子

繭玉の触れたるのみに母揺らぐ

川波は白き布なり初芝居

安心の底に埋もれて寒鯉は

—「俳句」一月号より—

死ぬまでと誓ひて淡くなり霜夜

介護の手また洗ひをるクリスマス

厚着の子涙を横に拭ひけり

初がすみ父も柱も動かざる

はじめより歪みてゐたる鏡餅



おほかたは忘れし父に屠蘇をつぐ

土蜘蛛は討たれてばかり読始

海神に射初の音のとどきけり

破魔矢立て歩めば山河従ひぬ

はづみても土の色なり初雀

宝船脚衰へし父に敷く

手をひろげ見せ合つてゐる春著の子

はつきりと言へぬ子の手に独楽を置く

寒満月自決の刃先思ふべし

揚げられて花のごとしや鬼虎魚

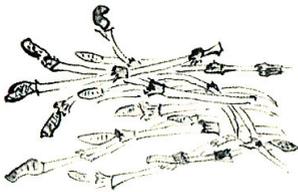
寒鯉の池動かして現るる

湯槽まで手摺めぐらせ春を待つ

動かぬ水

高倉和子

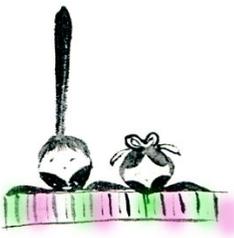
着ぶくれの母のまはりに物いろいろ
裏返る形で倒れ破れ蓮
破れ蓮の動かぬ水となりにつけり
吊橋の真中の風や十二月
長生きを詫びたる父や屠蘇祝ふ
単線の両側に雪残りけり
母に聞く昔の暮し女正月
山褰の尖りてきたる寒波かな
厚着して素通りしたる恋もまた
豆撒きの一人はすでに飽きてをり



砂時計

中田みなみ

年用意犬の床屋に予約入れ
十二月軀のうちにある砂時計
杯を唇にし眺め初衣桁
久々に衣擦れを聞く御慶かな
珍しく父が見送る春着の娘
ちやんちやんこ老い手作りの味噌の香す
焼諸屋路地あたたために来たりけり
笹鳴や影うつくしく籠編めり
枯並木ばかり描きをる無精髭
木々枯れてまた青年が村を出づ



被爆マリア

荒井千佐代

小雪や出船の笛の峰越えて
月夜間のをとこが棕櫚を剥ぎにけり
胴残る被爆灯台冬銀河
海沿ひの一本道をクリスマス
聖夜ミサ闇に轍のかたくあり
聖樹の星へみどりごを差し上ぐる
礁ひとつ波に攻められ小晦日
大年のちちははの木を巡りけり
糠雨を駆けきて納めミサを弾く
凍て兆す被爆マリアの眼窩にも



例大祭

服部早苗

太鼓橋晴れの朱さや七五三

秋の夜やうらのつかさの話など

寿老人あたりの石路の花盛り

狐火やこれより江戸へ約十里

見頃過ぎと貼られてゐたり冬紅葉

例大祭わたぬいて猪吊るす店

銀杏落葉なだれ落ちとふ一夜あり

綿虫のふはと秩父の単線路

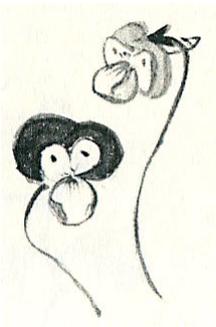
寒禽やポストに隠す家の鍵

皇帝ダリアいぶかる顔を見おろす冬



初景色

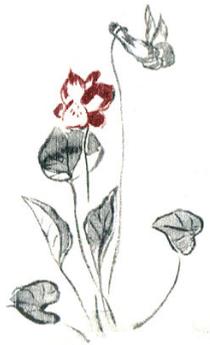
銀杏ちる里のくらしを知りつくし
子が掘つて切り疵多きさつま藪
灘風にのりて武の神還られし
地獄絵の極彩色に年つまる
冬ざれの端まで嬰が畳這ふ
歳問へば指で答ふるお正月
杖の歩の門までといふ初景色
父に袖あづけて歩む春著の子
大岩に杖立てかけて寒行者
手を拍つて筋を誘ふ寒日和



柴田志津子

焚火

はじまりの始めの杭を鴨の海
なかなかのものその菊の活けやうも
身に入むや喪服の赤き定期入
掃いてから行けと落葉の通せん坊
飛び下がる焚火の竹の爆ぜるたび
目分量ぴつたり枡の新小豆
鶴くるきのふもけふもととひも
食みこぼす夫をちらりと零余子飯
目標をまた立て直す山河枯れ
あやまちの始めは知らず去年今年



だいじみどり

お年玉

秋 千 晴

埋み火

宮井 知英

清め酒風に飛ばされ漁始

お年玉貰ふ時みな良い子かな

勝ち独楽を宝のやうに持ち帰る

猪肉の分配に犬加はりし

裸木の毛細血管あらはなり

冬晴や炭坑王の床柱

艶々の林檎に毒のありさうな

浜焼きの弾ける音や冬ぬくし

湾刃のたればの北に灘あり十二月

埋み火や句心てふは恋心

寒の水火伏せの神に奉る

凍蝶の吹かれて少し傾ぎけり

姿見の中へ手招く雪女郎

小面と般若は表裏冬の薔薇

葛藤の後の諦観日脚伸ぶ

目玉より崩れてきたる雪だるま

白鳥

あさなが捷

根深汁

大地真理

怒りゐる形に滝の凍りたる

淵に潜む竜の尻尾に躓きぬ

白鳥の脚を揃へて下りて来し

秋日背にリハビリの影伸ぶ縮む

白鳥の羽根きしませて飛び立てり

傷癒えてひとりて遠出小鳥来る

オリオンや漢字の多き賢治集

大噓して院長の現るる

白鳥の首をたたみて闇に浮く

病窓の二枚の世界冬の月

毛糸編むをんななかなか譲らざり

武士の出といふも足軽根深汁

何ごとも母はうべなひ冬日向

雪女沈むも水輪なかりけり

雪解けの音重なりて押し寄する

古民家の千本格子日脚伸ぶ